

わが友 モンテーニュ

——モンテーニュ再び——

『ミシェル城館の人』を再読した。いつもながらのモンテーニュの皮肉っぽい言いまわしに、苦笑を禁じ得なかった。

多くの警護に囲まれて便器に跨る王侯などは、とても幸福だとは思えないのだが、多くの人は王侯の生活を羨む。

モンテーニュといえば『随想録』だが、たとえば関根秀雄氏訳のそれは上下2巻、1200頁に及ぶ大作で、西欧の歴史や思想史の知識がないと手軽に理解できないから、愛読書にするわけにはいかない。わたしも20代半ばに『随想録』を買ったが、積んどくだけだった。時折ハッとする警句や处世の智慧に触れ、読み通したいものと思いながら時間がたってしまった。

だが、堀田善衛氏の『ミシェル城館の人』が出版され、事情は変わった。モンテーニュの人となりを理解する、絶好の機会を得たのである。

『ミシェル城館の人』は3部作から成り、第1部「争乱の時代」、第2部「自然 理性 運命」、第3部「精神の祝祭」から成る。

副題から見てもモンテーニュの人となりの一端が伺われるが、大まかな内容はその帯書きにも伺われる。

16世紀フランス・ルネッサンスの思想家ミシェル・ド・モンテーニュ。乱世を  
生きた偉大な思想家を生き生きと甦らせ、その時代をダイナミックに描く。

(第1部)

わたしは何を知るか？近代知識人の知の支えとなった理想家ミシェル・ド・モン  
テーニュの内面の劇に迫る。(第2部)

魂の遍歴『エッセー』の刊行を成し遂げたモンテーニュは、イタリアへ旅立つ一  
偉大な思想家の旅と思索の日々に同行する(第3部)。

この3部作も1200頁近くの大作だが、モンテーニュの人となり活写されているので、よほど読みやすい。読み物風にモンテーニュの人となり巧みに語られ、愉しみながら『随想録』のエッセンスに触れることができる。

本稿では、読者と共に『ミシェル城館の人』を読みながら、モンテーニュの思索の軌跡をたどってみたい（なお、特に断らない限り引用は全て同書からのモンテーニュの言葉の引用である。モンテーニュの言葉に対する堀田氏のコメントは、冒頭に（堀田）と付しておいた）。

話はちょっと脇道にそれる。わたしが司馬遼太郎を読み始めたのは、20代初めである。司馬さんがようやく世に注目され始めた頃から、わたしは彼の大ファンで次々とその著作を読破した。『随想録』を買ったのはその数年後だから、二人との付き合いは長い。

司馬さんとモンテーニュには、その思考方法が多分に似ている。

時代と国を異にするとはいえ、この2人は、装飾物をはぎ、人物や事象を直視するという点で、極めて近い。もっとも同じく直視するといっても、司馬さんはどこか人間的な暖かみのある眼差しが感じられるが、モンテーニュのそれは鋭角的で、即物的である。二人の温かみには明らかな差がある。

#### ——モンテーニュ的思考——

ミシェル・ド・モンテーニュが生きた16世紀は、日本では戦国時代の末期に当たる。モンテーニュは織田信長より1歳年長であった。『随想録』が最初に刊行されたのは1580年頃で、その2年後に日本では本能寺の変が起こっている。

中世という時代の思考回路は、現代人には理解しがたい。人々は感情が極めて優位で、理性など腹の足しにもしたくないのであった。理性は、ごく一握りの知識人の専有物にすぎなかった。

こんな時代だから、王侯貴族とか勲章などの装飾物は、庶民にとってめくるめくような意味を持っていたであろう。

ところが、この一癖も二癖もある思想家は、「王侯貴族」という装飾物に全く意味を見出さなかった。

わたしは、ひとりの分別のある人間にとって、便器に跨がっているところを20人

もの人に見守られていることが、何か大した幸福であるなどとは、一度も考えたことがない。

また、1万リーヴルの年金取得者とか、カサレを攻略した人とか、シエナを守った人に仕えられることが、人の善い達者な召使に仕えられるよりも、結構かつ快適であるとも考えたことがない。

（堀田）ここで〈便器に跨っている〉人は、王であり、〈カサレ（イタリア北部）を攻略した人〉とは、ブリサック元帥で、イタリア中部の〈シエナを守った人〉とは、モンリュック元帥のことであった。こういう武勇無双の侍従に、日夜かこまれていることは、さぞかし気詰りなことであったであろう。

モンテーニュは、王の側近として宮廷生活を観察する機会があった。人は一般に身近な人を低く評価しがちだが、それにしてもモンテーニュの言はあまりにも直截である。

モンテーニュは、硬直した単眼的発想を嫌う。彼の目は複眼であり、自由自在に伸び縮みするズームを持っている。ここら辺りが余人のまねのできないところである。

王侯が味わう本当の安楽は、すべて中ぐらいの境遇の人々と、共通のものである。

〔翼の生えた馬に乗ったり、神饌を食べたりするのは、神様のすることだ。〕彼らの睡眠や欲望は、われわれと違うわけがない。彼らの甲冑は、われわれのそれよりよく鍛えてあるわけではない。彼らの冠は、日や雨をしのぐわけではない。

人は金持ちや権力者や有名人を羨むが、彼らとてその楽しみは中流の人々とさほど違いがない、というのである。

モンテーニュにいわせれば、王侯の楽しみは現実ではないのだ。彼は「王侯の優越は、ほとんど想像の優越である」という。

### ——ときにはブドウ畑を失うほうが賢い——

モンテーニュの思考の特色の1つは、物事に対する世間的な手垢のついた評価を拒否し、対象の実質的な意味や価値を直截にとらえるところにある。

たとえばモンテーニュは裁判というものに過剰な期待を抱いていなかった。まして、裁判

が正義や真実を明らかにするものとは考えていなかった。

ときには黙ってブドウ畑を失くす方が裁判で争うよりも損をしないことがある。  
階段はいちばん下がもっとも確実である。（関根訳）

おそらくブドウ畑の所有権をめぐる争いであろう。モンテーニュは非生産的な裁判に金とエネルギーを費やすより、長期的な利害得失を考えるブドウ畑を失う方が得だというのである。若いときに裁判所に務めた時の実感であろう。

彼にとっては、栄誉、名誉、勲章も虚栄にすぎなかった。だが、彼の一筋縄でいかないところは、そうはいいつつ30歳の時、サン・ミシュル首飾章を受章したことである。ここら辺が彼の食えないところである。

モンテーニュは物の本質を直視し、その幻想度を分析してみせたが、世人が幻想の中に生きている以上、自分一人が理性に従って生きるのは青臭いのであろうか。勲章に何の幻想も持っていないモンテーニュだが、しかし彼は素直に勲章を受けた。

堀田氏は、モンテーニュの受勲についてこうコメントする。

勲章は要するにメダルであり、メダルはメダルであるにすぎない。栄誉や勲章などは、虚しい虚栄の業であるを見るとすれば、それもまたその通りであり、間違いのないことである。彼はまたそのことも知りつくしている。

物事は万華鏡を見るように、視点をずらせば全然違った世界が現れる。固定的視点こそは、モンテーニュが最も嫌う青臭い議論であつたろう。彼が受章したからといって、俗人と見るのは単純すぎるのであろうか。

争乱の時代に生きたモンテーニュは、とにかく酸いも甘いも知った、したたかな実践家であり思想家であつた。

#### ——モンテーニュとモラリストたち——

モンテーニュに比べると、視角の多様さ、思索の多彩さにおいて、他のモラリストや哲学者はかすんでしまう。

デカルトは、モンテーニュより63年ほど後に生まれた。彼はあらゆる事象を懐疑し、最も確実なる「存在」を求めた。そして、自分が疑っているという事実は疑えないとして、ついにあの有名な命題をうち立てた。

我思う、故に我あり（コギト・エルゴ・スム）。

だが、モンテーニュにいわせれば、こんな命題は循環論法にすぎない。

「我思う」という時、そう思う「我」という存在（主体）が、暗黙に前提されている。

「我思う」という時には、既に隠れた「我」が存在するのだから、「故に我あり」といつてみたところで堂々めぐりにすぎない。

モンテーニュはデカルトが生まれる4年前に死んでいるが、モンテーニュなら回りくどい批判はしない。恐らく、こういう（以下は、モンテーニュ流をまねた、わたしの創作である）。

まったく我が存在することはわたしにとって自明のことであって、我が存在を疑って多大な時間を費やすのは、無駄な作業としか思えない。ちなみに、畑を耕している農夫は哲学者よりはるかに健全な生活を送っている。彼らは殴られれば「痛い」と大声で叫ぶし、食べ物がなければ「もじい」と訴える。水がなければ時には他人の井戸水さえ奪う。

自分の存在は、証明の必要のない程明らかなことである。哲学者が「あらゆる事象を懐疑するのが哲学の基本だ」といって、自分を懐疑する作業に熱中するのを見てもわたしには感心できない。何事もそうだが、懐疑というものも理性のコントロールの下に置かないと、大きな過ちを犯してしまう。哲学者とはまあよく暇なことを考える人たちである。

モンテーニュに90年ほど遅れて生まれたパスカルは、理数的才能に秀でた天才だったが、世俗のこととなると視野が狭かった。彼は確率論を創始し、「パスカルの原理」を発見し、晩年には微分理論を確立し、不滅の業績をうち立てた。

しかし、思想的にはいわば「文学青年」にすぎず、「政治青年」のモンテーニュとは、思索の練度が違う（文学青年とは「自分の味方でないものは全て敵」と見る人を、政治青年とは「敵でないものは全て味方」と見る人を指す意味で使っている）。

パスカルの思想には、カトリックの中で最も禁欲的であったジャンセニスム（オランダの神学者ヤンセンの教義）が決定的な影響を与えている。宗教的であることは、他面、固定

的な視点で物を見ることに通ずる。パスカルの人間観察の目は、あまりにも文学的であったといえよう。

パスカルに遅れること100年ほどして生れたカントは、モンテーニュの対極にあるほどの堅物である。確かに彼の哲学上の功績は計り知れないが、彼もあまりにも真面目なキリスト教者であった。敬虔派の熱心な信者であった両親から、幼児期にその教えをインプットされ、そのくびきから逃れることができなかった。

古い形而上学を否定し自然科学を基礎づけた『純粹理性批判』を突き詰めれば、靈魂の不死や全能である神への懷疑が芽生えるはずである。しかし、「靈魂の不死が道徳的実践のために不可欠のものとして要請される」などという曖昧な理由で、靈魂の不死を認めてしまふ（『実践理性批判』）。

モンテーニュに200年近く遅れて生を受けたカントにして、キリスト教の影響は重いくびきとなって彼の思考を縛っていた。カントは、いわば、「象牙の塔の中の天才」にすぎない。

パスカルやカントとは違い、モンテーニュは神について沈黙を守っている。彼が無神論者か、そうでなくても不可知論者であることは間違いないと思う。彼の生きた時代に、キリスト教を否定するのは社会的な自殺を意味するだろう。あからさまに神を否定することはできなかったが、このしたたかな精神は、神を直接に否定するのではなく、神学を拒否するという方法で神を否定したのである。

モンテーニュはいう。

わたしは奇蹟というものには、断じて手を触れぬのである。

わたしはいささかも神学には通じていない。

わたしは神学のことなど一向に分からない。

堀田氏はこれを「行間に、神学などはしょせん虚妄の学だ、というほどのものがうかがえる断固たる拒否であった」と断じている。（続く）